

第一二五連隊長 鈴木栄助大佐

(名古屋―サイパン島にて譽第一一九三四部隊)

第一大隊長 和泉文三大尉

(テニアン島にて九五〇人)

第二大隊長 永田勲大尉(サイパン島にて戦死)

第三大隊長 野田義弘大尉(サイパン島にて戦死)

第一三六連隊長 小川雪松大佐(岐阜―サイパン島にて戦死)

海軍、中部太平洋方面艦隊司令長官

南雲忠一中将(サイパン島にて戦死)

第一航空艦隊司令長官 角田覚治中将

(テニアン島にて戦死)

なお、陸軍各部隊とも軍旗奉焼の日を終戦記念日として、往時を忍んでいるのであります。

## 戦争を知らない二年半

福岡県 八山 太四郎

私は福岡県三潞郡三潞町大字高三潞、八山音吉の長男(姉二人がおります)として、大正十一(一九二二)年十一月三十一日出生しました。昭和十二(一九三七)年三月、三潞尋常高等小学校を卒業し、引き続き三潞町青年学校本科五年と研究科を卒業しました。当時は、若い者は農業の傍ら青年学校に通学し、軍事教練を学び軍隊への入隊に準備致しました。

家業は一町一反の農地に米、麦を作ることを専業と致しておりました。父親を九歳の時に亡くし、母親ユミが二人の姉と私三人を養育しながら田畑を耕作し苦労しておりました。近所の人達からは男勝りと評判されておりましたが、昭和十八年三月下旬、私に召集令状の赤紙が来ました時に

は、五十二歳の母には大変ショックでした。

八山家にとりましては、名譽なことではありましたが、男の働き手を失うことは大変な痛手だったからです。私にとりましては、日本国民として軍隊に入隊することは男子の本懐ではありましたが、母の心中を考えますと胸が痛みました。男勝りの母は口には出しませんが、どんな辛いことであるか、私にはよく分かりました。大東亜戦争が激しくなる時でありましただけに、心で泣いて顔で笑っての複雑な気持ちであったと思います。

出征当日は、地区から三人出征しますので、区長様はじめ多くの方々が、日の丸の小旗を振って盛大に見送って下さいました。私が三人を代表して、「お国の為に私達は一身を投げ打ち、がんばって来ます。後に残る家族のことは宜しくお願い致します」との意味を含めてお礼を申し上げました。母のことは、姉二人に宜しく頼み、勇躍久留米に向かって出発しました。

久留米の独立山砲隊に入隊しまして一週間は、身体検査や注射打ち、装具の準備等でアツと言う間に過ぎました。

四月初め私達五十人は満州派遣を命ぜられ、久留米駅まで歩いて、列車で下関へ、さらに関釜連絡船で釜山港に渡り、釜山からは列車で京城（ソウル）經由で朝鮮半島を縦断、安東、奉天（瀋陽）を經由して目的地開源駅へ三日がかりで到着しました。車窓より見る満州の平原の広さに驚きました。かねて満州の広いことは聴いておりましたが、開源駅に着いて、駅近くの部隊の営内に入ってまた驚きました。広い広い部隊内、部隊本部は煉瓦作りの立派な建物でした。

部隊名は満州第九四部隊で、部隊長は高森大佐、中隊長は堀中尉、私の内務班長は徳永軍曹で、五十人は五人ずつそれぞれの内務班に配属されました。

私達の入る兵舎は、広い営内にある何棟かの三角兵舎の屋根の低い狭苦しい建物で、舎内には寒

くないようにベチカで暖を採るように設備されておりました。四月上旬と言っても、開源はまだまだ寒く、軍服の着替えから始まりました。そして五尺（一五〇センチ）の寝台（藁でできたもの）に五枚の毛布、小さな物入れの木箱（軍人勅諭等書物を保管する保管箱）です。

寝台に坐らされた私達に、内務班勤務の上等兵から班長殿はじめ古兵の紹介があり、種々の注意や説明が行われました。こうしていよいよ軍隊生活が始まりました。この日から炊事当番、不寝番、昼間の軍事訓練、夜は軍人勅諭の朗読、暗誦が始まり、間違えればびしゃり、返事の声が小さいとまた殴られ、古兵の怒鳴る声、八時からの点呼の時間の厳しさが毎夜続きました。私は青年学校で訓練を受けておりましたので仲間の人より叩かれることも少なくてすみませんでした。私達は三カ月間山砲の特別訓練を受けました。

軍隊の厳しさは覚悟して来ましたが、訓練の厳しさと古兵の厳しいしつけには、男涙を流すこと

も度々ありました。

五月になってやっと柳の芽が吹き出し、春が来たなあと感じます頃には、蠅も多くなり、食事の時の蠅の追い払いも一苦勞でした。七月になりまずと、一期の検閲も終わり一等兵に進級しました。そして日曜日になりますと外出も許可されるようになりました。この昼間の一日が自由な時間でした。開源の街は大きな街で、日本の方とも街中でお会いすることもありました。

走ること、角力すもうをとることも私の得意でした。部隊の運動会は盛会でした。この日、山下奉文閣下もお見えになり激励して下さいました。満州の夏は大陸性気候のせいでしょうか、大変暑く、汗は軍服ににじみ出る毎日でした。その夏も二カ月間で終わり、九月になれば朝夕涼しくなります。朝鮮人の兵隊さんもおりましたが、厳しい訓練に耐えかねて逃亡する兵隊もおりまして、逃亡兵の出る度毎に私達への監視も厳しくなりました。

十一月になりますと北の風も冷たく、部隊全部が雪に覆われます。初めて迎える冬将軍、防寒服に着替え訓練もすっかり変わります。馬は馬で雪と同じ色に敵の目を欺く白い服装で訓練が行われます。零下一〇度の寒空の中での訓練は身にこたえました。

山砲を引いて雪の坂道を登る馬が汗びっしょりになり、足を止めますと「それ！ よいしょ」と掛け声で車輪の車を押し上げる訓練。その時は防寒服の中は汗びっしょりでした。鉄の扉に手を当てるたびったりとくっついて離れない位冷えきっており、入浴してしばらくタオルをそのままにしておきますと、ぴんと凍って杖のようになります。温かい九州に住んでおりました私にとりましては、銀世界の雪は珍しくありましたが、雪野原の中での訓練は骨身にこたえました。食事は米、麦、高粱をまぜた飯、たまにパン食もありましたが、金属の椀一杯大盛りにして食べる事ができましたので、食糧不足は感じませんでした。

いつも頭の中から離れないのは母の姿でした。寝台に身を横たえようと、一人でがんばっている母の顔が浮かんで来て「母も五十三歳になったなあ！ 手紙一本くれないのも心配をかけまいとする親心だなあ、元気で頑張ってよ」と思わず涙を流すこともありました。

大東亜戦争がどのようなになっているか、詳しくは知る由もありませんでしたが、昭和十九年三月上旬、第九四四部隊主力が南方戦線へ支援のため移動することになり、同部隊は解散することになりました。

後日聴きました話では、サイパン方面に行ったと言うことでした。久留米から合流しました五十人は残留することになり、主力部隊と別れることになりました。まさかこれが最後の別れになるとは、夢々思わず「元気で！ がんばって」と手を振って見送りました。ずっと後に行った部隊はサイパン島で玉砕したと知らされ、運命とは言葉悲喜こもごも戦争の悲しさを思い知らされまし

た。

残留になった私共五十人は、ソ満国境を警備することを命ぜられ、開源駅から列車に乗り新京（長春）、牡丹江を経由して、二日目にソ満国境に近い山の中の虎林駐屯地の歩兵部隊に合流しました。部隊名はそのまま第九四部隊として、兵科の違う歩兵部隊として警備に当たることになりました。

虎林は、開源の広々とした平原地と違い山の中で、兵舎も土を掘った中に建物を建て、屋根は土を覆せた天井の低い兵舎でした。真中にペチカがあり、暖をとる設備がしてありました。寒さを防ぐことと雪が多いので建物に負担がかからぬように建ててありました。

兵舎の近くには街もなく、ソ連軍の行動を監視する役目でありました。四月下旬とは申せ北満の春はまだまだ遠く、雪がいつばい残っておりまして。私達は凍った土を掘り、ソ連軍の戦争に備え対戦車防護の壕を掘り続けました。併せて非常事

態に備えての戦闘訓練が繰り返されました。

当時は独ソ戦も終息し、極東に軍隊を増加させている状態でしたが、ソ満国境は静かでした。六月になりまずと一面雪野原の雪も溶け、緑の青々とした山、野原は開源駐屯地と違い変化のある風景でした。

対ソ訓練を続けながら、一日たりとも疎かにできない警備に神経をとがらせながら警備に当たりました。南方作戦の模様も、内地の様子も知らぬままに訓練々々で、北満の日々を過ごしました。北満の夕陽は大きく赤く美しいと言われておりますが、山の中ではその美しさを見ることはできません。

短い夏もあつと言う間に過ぎ、寒風が吹き荒れる冬がやって来ます。開源も寒かったけれど、北満の寒さはまた違う。寒いよりも痛い位骨身に沁みました。その中の防寒服に身を固めた夜の歩哨は、一層寒さが身に沁みしました。零下一五度、

二〇度の中での立哨、思わず内地で歌っていた「満州想えば」の歌が思い出され口吟んでいました。

「ああまたも雪空 夜風の寒さ

満州想えば ええ満州が気にかかる」

せめて歌でも唄わねば寒さが我慢できない位でした。

営内生活も一等兵になっておりましたので、初年兵の時のように辛くはありませんでした。厳しい軍紀ときびしい寒さの中で、昭和二十年の新しい年を迎えました。一兵卒の私には、戦況がどんなになっているのか分からないまま、毎日、軍人勅諭を守り、上官の指示を忠実に守り軍務に服す。それ一筋で頑張ってきました。

春を迎えようとする矢先、私たち五〇人は本土防衛のため、内地勤務を命ぜられました。その時、中隊長より、内地の緊迫した状況を知らされ驚きました。

四月上旬、五〇人は列車に乗り込み、牡丹江より新京、奉天を經由して朝鮮半島を縦断し、釜山港より博多築港に上陸しました。冷泉小学校で休息し、博多駅より鹿児島本線で人吉―吉松駅へ、さらに吉松駅より吉都線に乗り換えて高原駅で下車し、霧島山麓の高原駐屯地の第四九〇三部隊に配属されました。

戦争の厳しさは博多築港に上陸しました直後から肌を感じて分かりました。任務は、四国、九州の防衛と云うことでありましたが、山の中で何の防衛かと、ぴんと来ませんでした。駐屯地の近くにちょっとした民家の大きな空家がありましたので、そこに寝泊まりして訓練を受けました。近くには八太郎温泉がありました。敵機の空襲に備え、防空壕掘りも致しました。

この頃は鹿児島県の知覧陸軍特攻基地や、鹿屋海軍特攻基地、鹿児島市内が空襲を受けており、高原駐屯地にもグラマンによる機銃掃射も何回かありました。私自身は直接は受けませんでした

が、戦友達が川で洗濯をしている所を機銃掃射を受け、その恐怖を語ってくれました。

七月に入りますと田植えの時期です。人手が足りないために、兵隊が民家の田植えの応援に行ってくれました。

八月九日、ソ連軍が満州に突入したことを聴かされ、虎林に残った人達のことを思い出し、皆どうしたろうかと、北満に思いを馳せ、無事を祈りました。広島、長崎へ新型爆弾の投下により、多数の人々が死亡された等。山の中にも次々と情報が遅れながらも報道され胸を痛めました。

八月中旬、戦友から十五日で戦争が終わったことを聴かされびっくりしました。ラジオも何も聴いておりませんので詳しくは判らないまま、戦争は負けたのかと残念でなりませんでした。そして上官より終戦の詔勅が下ったことを聞き、無念でなりませんでした。この月私もやっと上等兵に進級を命ぜられました。

敗戦を知らされずと共に、身の廻りを整理す

ることを告げられ、戦争らしい戦争もせずして、移動移動で忙しく、今度は敗戦により後片付けに多忙になりました。

九月二十三日、部隊の解散を命ぜられたので、生死を共にと約束しました戦友達と、悲しい別れをせねばならないことになりました。お許しを頂き、毛布、飯盒、水筒等持てるだけ持って、高原駅より混み合う列車に乗り久留米駅に向かいました。余り多く持って来ましたので、駅で下車して困っているところに、石橋さんを発見しお願いして半分持って貰い自宅に帰りました。

私の元気で無事に帰って来た姿を見て、母も姉達も涙を流して喜んでくれました。母から友達も数人戦死されたことを聞き、戦争の悲惨さを痛切に感じました。

戦争が二度とあってはならないと、わが身二年半の辛さを振り返りながら胆に銘じました。